

後藤新平は1857（安政4）年6月4日、陸中国胆沢郡塩釜村（現在の水沢区）に生まれました。ことしでちょうど生誕150年になります。

後藤家は、同じく本市出身の偉人・高野長英の分家筋に当たります。父實崇は仙台藩水沢城主留守家家士（小姓役・禄高10石余）で和漢の学問に通じ、母利恵は留守家侍医・坂野長安の娘。祖父は家塾を開いて子どもたちを教え、今でいえば教育家。とはいえ必ずしも裕福な生活ではありませんでした。

長男の新平は10歳で留守家の奥小姓となり、藩校立生館に入学。翌年戊辰戦争がおこり、仙台藩は幕府側として戦って敗れ、後藤家は平民の身分として再出発を余儀なくされました。少年期の新平はわんぱくで手がつけられない面もありましたが、学業成績は抜群で、一緒に学んだ山崎為徳・齋藤實らとともに「三秀才」と呼ばれていました。

新平の生家は水沢区吉小路に現存し、県有形文化財として保存、公開されています。水沢城は現在の市役所本庁舎付近に広がっていたことから、新平はまさに城下の街を走り回って育ったことでしょう。

人は人によって育てられる

先人・高野長英の影響

新平自身が高野長英の親族に当たったことを知ったのは「謀反人の子」と周囲からののしられたことがきっかけでした。外国船を武力で追い払おうとする幕府の政策を公然と批判した長英。しかし、その後の歴史を見れば、明治維新を先取りする先覚者だったことが分かります。開明的な人物が同郷で、しかも親族であったことに気付いたとき、少年の心には見知らぬ西洋の文化や、学問に対する関心がわき立ったことでしょう。

明治という時代は、江戸時代の長い安定を打ち破り、日本が欧米列強に追いつこうとしていたとき。新平はこのような当時の気風や、武士から平民に身分を変えざるを得なかった状況などをバネに、成長していったのではないのでしょうか。

新平を受け継ぐ奥州人①

生家には新平の過去が隠されています



猪岡真子さん（左）
岩淵恵美さん（中）
菊地詩子さん（右）

武家住宅資料館職員

武家住宅資料館では、後藤新平の生家も管理しています。土日はもちろん平日でも多くの人たちが訪れ、奥州市が生んだ偉大な先人が育った場所を、肌で感じていきます。全国から訪れる人の中には新平を詳しく知る人もいて、新平の功績はまさに全国区だったのだと、とても誇らしく思います。

新平は幼少時代、ガキ大将と呼ばれていました。生家には、いたずらをして母にしかられ、罰として閉じ込められた小屋が残っています。ここを見学する人たちは皆、新平のやんちゃな一面を垣間見、ほほ笑ましい表情を見せていくんですよ。

新平の意外な小話

青年時代の新平は、ハンサムで女性にもてたそうです。しかし顔で苦労したのが24歳で就任した愛知県病院長時代。若過ぎる顔立ちに、院長の代理と見られることもしばしば。



窮余の策として虎ひげを伸ばし（5分略年表写真参照）、貫録を付けました。

肥後（熊本県）出身。幕末の儒学者・横井小楠の教えを受ける。出身や出自にとられることなく、優秀な人材を登用した。胆沢県赴任後は、福島県令（知事）、愛知県令などを歴任。優れた行政官として評価が高く、後に貴族院議員となった。



安場保和
（1835～1899）

伊勢（三重県）出身。安場保和が最も信頼を寄せた部下で、彼に従って各地に赴任した。後に新平が台湾総督府民政局長として赴任した際、偶然にも総督府県治課に勤務。新平から台南県知事に推薦されるが、辞退して東京に帰った。



阿川光裕
（1845～1906）

育ての親・安場と阿川

1869（明治2）年、新平は後の人生に大きな影響を与える人たちと出会います。この年、水沢に胆沢県庁が置かれ、新平は齋藤實らとともに給仕として採用されました。

新平の資質を最初に見抜いたのは、政府から派遣された大参事（現在の副知事に相当）の安場保和で、「この子は将来参議（大臣）にもなりうる人材。性格をたわめることなく伸ばしてもらいたい」と部下の阿川光裕に育成を託しました。

明治初期は、特に戊辰戦争で最後まで抵抗した東北地方出身者が軽蔑される時代でした。安場はそのような人物ではなく、自分の書生として働きながら勉強する新平を、「多忙な自分の世話をさせていたのでは落ち着いて勉強できないから」と将来を優先させたのです。阿川も公平無私な人で、厳しくも温かく指導に当たりました。

正しいと思えば即断行

2人との縁はこのまま続きます。新平は14歳で書生として上京しますが、1年後に主人と衝突して挫折。安場とともに福島県庁に移っていた阿川は、医者

になることを勧め、自ら学費や生活費などを援助して須賀川（福島県）に呼び寄せました。1874（明治7）年、新平は意を決して須賀川医学校に入学し、近代科学の物理学や解剖学、病床実験などを短期間で習得。わずか1年半後には、18歳で五等医として認められるのです。

10代の多感な時期に、主人と衝突してまで自分の信念を曲げず、新しいことには食欲に取り組むなど、既に「後藤新平」としての基礎が固まっていたものといえるでしょう。

1876（明治9）年、新平は愛知県令（知事）となっていた安場らの勧めで、愛知県病院三等医として赴任。オーストリア医師に師事し、わずか24歳で愛知医学校校長兼愛知病院長に抜擢されました。

岐阜で暴漢に襲われた板垣退助の治療を行ったのもこの時。愛知県庁は、板垣が自由民権運動の先頭に立っていたことから、政府の意向を気にするあまり、板垣側からの医師派遣要請に許可を出しませんでした。しかし新平は独断で岐阜に向い、治療に当たりました。その態度と受け答えに「彼（新平）を政治家にできないのが残念」と板垣は言ったそうです。そこには、正しいと思えば困難があっても断行するという姿がうかがえます。

後藤新平略年表

年表中の年齢はその年の満年齢を示します。

1857（安政4）

▼陸中国胆沢郡塩釜村吉小路に生まれる

1864（元治元） 7歳

▼武下節山の家塾で漢学を学ぶ

1867（慶応3） 10歳

▼留守家奥小姓となる

1869（明治2） 12歳

▼留守家が削封され、後藤家も土着し平民となる

▼安場保和大参事の学僕となる

1871（明治4） 14歳

▼初めて上京し、太政官少史・莊村省三の学僕となるも、約1年で帰郷



上京したころの新平

1873（明治6） 16歳

▼阿川光裕の勧めで、福島県須賀川に遊学。第一洋学校に入学

1874（明治7） 17歳

▼帰郷するも、父の戒めで再び須賀川へ。須賀川医学校に入学

1876（明治9） 19歳

▼愛知県病院三等医に。ローレツ博士の指導を受ける

1877（明治10） 20歳

▼医師開業免許が授与される

▼大阪陸軍臨時病院に勤務し軍医の資格を得る

1881（明治14） 24歳

▼愛知医学校校長兼愛知病院長に就任

1882（明治15） 25歳

▼岐阜で暴漢に襲われた板垣退助の手当てをする

1883（明治16） 26歳

▼内務省御用掛、衛生局照査係副長となる

▼安場保和の二女和子と結婚



和子夫人と新平

1890（明治23） 33歳

▼郷里から国会議員立候補の勧誘を受けるも謝絶

▼自費でのドイツ留学を許可され、社会政策、衛生制度などを学ぶ

1892（明治25） 35歳

▼ミュンヘン大学で医学博士の学位を得る。帰国後、内務省衛生局長となる